



晩年のヤルゼルスキ (2004)

社会主義時代の最後の独裁者

ヤルゼル

ギリシア悲劇の登場人物の

今年5月25日、社会主義時代の最後の独裁者ヤルゼルスキが亡くなった。享年90。ポーランド現代史において毀誉褒貶の的となる、あるいは極端な感情を引き起こすという点でヤルゼルスキの右に出る者はいないだろう。それは墓場まで追いかけてきた。有名人が葬られるポヴォンスキ墓地の軍人用の一角に葬られたが、それを許すべきかどうかで国が大揺れに揺れた。デモ隊は葬儀の席だけではなく、墓地にまで押しかけた。埋葬後も死者に辱めが加えられないよう、しばらく衛兵が立つことになった。

ヤルゼルスキは二つの大きな功績で知られている。一つはいうまでもなく1981年に戒厳令を実施したことである。もう一つは1989年に民主化を実施し、今日の政治体制の基礎を作ったことである。

戒厳令はまるでドイツ人がやったかのように徹底したものだった。『連帯』労組の活動家は一網打尽となり、収容所に入れられた。抵抗は容赦なく打破された。ヤルゼルスキはほぼすべてについて陣頭指揮を執った。独裁者は数多いけれども、このときのヤルゼルスキほど独裁的であったのは少ないだろう。そのような強権政治が7年間も続いた。そのときに弾圧された人々の、ヤルゼルスキへの怨恨は、ごく少数者を除き、根深いものとなった。

しかし、すべての人々が戒厳令を恨んだわけではない。世論調査によると、国民のヤルゼルスキへの信頼度は1987年7月に82%、11月に73%であった。これは戒厳令への支持と見てよいだろう。民主化後もそれは大きく変わらなかった。戒厳令は正しかったとする者が2001年に51%、2011年に44%もいた。ヤルゼルスキの死の報に接してインターネットに寄せられた意見の中には、もし戒厳令がなかったなら、ポーランドは今日のウクライナのようになっていただろうというのがあった。

民主化のきっかけをなした円卓会議を提唱したのは、他でもなくヤルゼルスキだった。共産党(統一労働者党)中央委員会で、自らの地位を賭けて『連帯』

労組の合法化のための弁を奮った。1989年6月の最初の(部分的)自由選挙にはむしろ自信をもって臨んだ。なぜなら世論調査では支持率が高かったからである。しかし、あに囚らんや実際の選挙では共産党とその同盟政党は大敗を喫してしまった。ヤルゼルスキは事前の約束に基づいて新設の大統領の地位に就いた。自分に与えられた権限はほとんど行使せず、『連帯』政府に対して大いに協力的であった。しかし、野心に燃えたワレサから退陣要求が出ると、辞任するのではなく「任期を短縮する」という法律を作らせて、さっと身を引いた。

ヤルゼルスキは現代ポーランドの矛盾を一身のうちに体現していた。地主貴族の家に生まれ、カトリックの寄宿学校で教育を受け、家族とともに避難したリトアニアでソ連軍に捕まり、そのままシベリアに流刑となった。シベリアでは重労働で雪目を患い、父親を亡くした。ソ連内で形成されつつあったロンドン亡命政府軍(アンデルス軍)に応募しようとしたが間に合わず、仕方なしに親ソ派の軍隊に応募した。皮肉なものである。これがヤルゼルスキの運命を180度変えることになった。激しい戦闘で何度も傷つき、命を落としそうになりながら、ベルリンまで行軍した。その中で多くの輝かしい軍功を挙げた。

ソ連滞在中にヤルゼルスキはロシア人が好きになり、また共産主義を受け入れて、帰国後に共産党に入党した。無神論者となり、左翼としての強い自覚をもった。

農地改革にはもちろん賛成だった。かつての領地を訪れても、自分たちの住んでいた豪邸が廃墟となり、召使いたちが立派な家に住んでいるのを見て、これでよいのだ、これが進歩というものだと考えた。

このようにヤルゼルスキは相反するものを自分の中に同時に抱えこんだ。良きにつけ悪きにつけ自分の運命と思われたものをしっかりと受けとめ、ためらわずに進んだ。その生き方には、ギリシア悲劇の中の登場人物のようなところがある。

スキ

ような生き方

伊東 孝之



いとう たかゆき

1941年、三重県生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了(国際学修士)。北海道大学、早稲田大学教授を歴任。北海道大学、早稲田大学名誉教授。専門は国際関係論、比較政治学、ポーランドを中心とした東欧地域研究。

ポーランドでは珍しい完璧主義者であった。戦場においても平時の職場においても鬼のような仕事人間で、部下泣かせであった。戒厳令を布く前の1週間はほとんど自宅に戻らず、執務室の隣で寝起きした。国民に対して苛酷な命令をつぎつぎと発した。マキアヴェッリが「君主は民から愛されるのではなく、恐れられるべきである」と言っているが、戒厳令時代のヤルゼルスキはまさにマキアヴェッリの君主を地で行った感がある。

しかし、仕事を離れると、意外に優しい人間であった。「政治を離れると、ヤルゼルスキはまったく別人だった」とワレサは語っている。「ゆるゆるとして、親しみの



ヤルゼルスキの娘モニカ(2014)

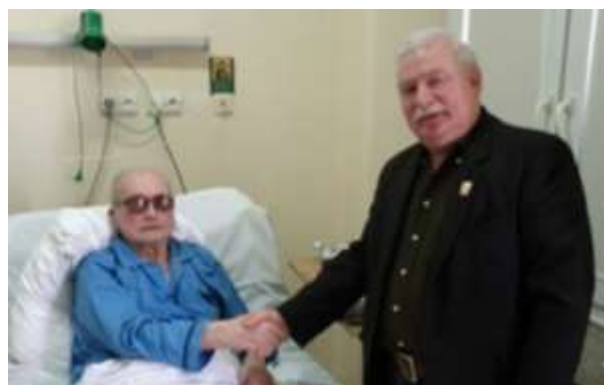
の持てる、とても知的な人だった。私にはあの時代のイメージとどうしても合わないのだ。」実は仕事においてもなかなかの教養人、文人であった。とくに演説

の文章に凝った。たったの数行にこだわって、何十回も書きなおし、書きなおさせた。そのためにヤルゼルスキの文章は共産党指導者のものとは思えないほど格調が高く、教養に溢れ、知的なアピールがあった。立ち居振る舞いにもエレガントさがあった。舞台上に登場するときよりもむしろ舞台を去るとき姿が人々に印象を残した。位人臣を極めたながら、生涯その暮らしぶりは質素であった。本人だけではなく、妻もシベリアから戻った母親も妹も驚くほど質素な生涯を送った。

しかし、ヤルゼルスキのままにならないものがあった。それは娘のモニカであった。モニカは一人娘で、

父親が大嫌いだった。無理もない、仕事人間で自宅に帰ることがほとんどない日々もあった。戒厳令が実施された年に大学に入るはずだったが、なぜか大学に行くことを拒んだ。モニカがつきあった仲間には、反対派の知識人や『連帯』運動の活動家が多かった。1983年には自殺未遂事件を起こした。モニカが選んだのは無骨な父親からは想像できないようなファッション・デザイナーの仕事だった。毎号のようにその姿がファッション誌を飾るようになったが、歳をとるにつれその顔はますます父親とそっくりになってきた。2013年に『同志乙女』を世に問い、ベストセラーとなった。1年後には『家族』を発表した。いずれも自伝的な、ヤルゼルスキ家の物語である。父親が死んだ今、モニカはどう感じているだろうか。

死の13日前、ヤルゼルスキは突然神父を呼んでカトリックに入信したいと告げた。それはけっして衰弱した老人の、朦朧とした中での決断ではなく、意識的な、自由な決断であった。無神論者であり続けたヤルゼルスキはカトリック教徒として死んだ。葬儀はカトリック教会で行われ、カトリック教徒のワレサも臨席することに応じた。



ヤルゼルスキの病床を見舞うワレサ

2014年6月23日(月)北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにて伊東孝之氏の講演「政治変動と国際環境—ポーランド(1943-48年)とウクライナ(2013-14年)」が行なわれ、本会会員有志が聴講しました。